

シルクロードの医学

——特に蒙古、チベットの喇嘛医学——

木 崎 国 嘉

現在は「シルクロード・ブーム」といわれ、シルクロードに関する情報が巷に充満している。

そもそもシルクロードという言葉は1877年刊行されたドイツの心理学者 Ferdinand von Richthofen の China の第一巻に、Ders, über die zentralasiatischen Seidenstrassen bis zum 2. Jh. n. Chr. という記述があり、そのドイツ語の Seidenstrassen が英語に訳されて Silkroad となったものである。中央アジアを中心とした東西交流の道をヨーロッパ側からみた呼称ということができる。

なお、Asia とはアッシリア語の Açu, つまり日出とか東方という意味をもっており、絹は漢代以前からセル、またはセレスの名で西方世界に知られていて、驚くべき高価な布であり、それは漠然と China そのものをも指していたのである。

このユーラシア大陸横断の道のひろい呼称シルクロードは、東方から見ると陶磁、ブドウ、クジヤク、紙、ガラス、蓮華の道でもあったわけである。

それにはいろいろのルートがあり、その主なものは——

まず中央の砂漠地帯のオアシス道を綴りながら行く——オアシス・ルート

北方の草原地帯を結ぶ——ステップ・ルート

南方の海洋沿岸の——マリン・ルート

そしてその各々にも数多くのバイパスがある。

その起点となるのは西方では現在のトルコのイスタンブール、東方はだいたい敦煌と考えていいだろう。

20世紀最大の歴史家といわれるトインビーは、文明を分類して十字路の文明、終着駅の文明としたが、シルクロードはそのうち代表的な十字路の文明ということができるのではないだろうか。

このヨーロッパ——アジアにまたがる古代ルートは BC 2 世紀、漢の武帝は西域を平定、月氏と結んで匈奴を討つため張騫^{ケン}を使者に送った（BC 139年）ことが司馬遷の「史記」にあり、西方からはアレキサンドロス大王の東征などが契機となっているが、勿論もっと以前から、人類のあくなき探険欲と、経済的の欲望から交流はあったとするのが当然であろう。

1900年、タクラマカン砂漠、ロプノールの西のほとりでスウェーデンのスウェン・ヘディンが桜蘭（BC 1 世紀—AD 4 世紀）の跡を発見し、住居跡、仏殿跡、墓地があり、多くの遺物や本簡文書を採集し、「美しさ限りなき女王」のミイラを発見した。

大谷光瑞は1902年～1915年に亘り3回、探険隊を派遣、橋瑞超は1908年と1910年に多くの遺物と「李柏文書」を発見した。

イギリスのスタインも1906年、更に1914～1915年に探険した。

シルクロードの医学

シルクロードはヨーロッパ側からいえば、オリエントから、絹（その他スパイス、金、宝石）の伝えられる道で、オリエントとはラテン語の Oriens、つまり Orior（昇るこ）の派生語、太陽の出るところ、東方を意味する。西洋は Occident でラテン語の Occidere（没する）の現在分詞 Occidens からの派生語、太陽の没するところ、西方を意味する。

もっとも常識的なメインルートと考えられているのは――

洛陽（シナエ metropolis）―長安（セラ metropolis）―蘭州―敦煌―ロブノール―桜蘭―カシュガル―貴山城―サマルカンド―カスピ海―コーカサス―黒海―ビザンチウム―ギリシア―ローマ、のオアシス・ルートである。

桜蘭から道は2つに分かれ天山南路と天山北路（天山の北側）となる。

天山南路にも北に向って天山山脈の南麓をオアシスをつないで行く西域北道と、南の崑崙山脈の北麓を西に進む西域南道となる。

こうしたルートの多くの部分を占めるのがチベット族や蒙古族の遊牧地帯なのである。

私は以前から旅行や探険行には三段階のことが必要だという考えをもって来た。

その1つは、その地域の歴史や地理、民俗などに関する事前の綿密な調査、できればその内の重要な部分への予備的旅行や取材である。

その2は、全地域を更にゆっくり時間をかけて、見聞し、資料を集めることであるが、この際に必須事項は一切の先入感を捨て去り、いわば白紙のままで記録してくることである。

その3は、足りない所を更に補充する意味の部分旅行や取材を行ない、多くの文献と対比しながら、正確な結論を導き出すことである。

私がシルクロードに魅力を感じてからは既に数十年もなり、上記の1、と2に関する断片的な調査や旅行を重ねてきたが、あまりにも広範すぎて何時自分の考えを全部まとめ得るかは予想もできない状態である。

そこで今回はシルクロードの東西の起点や、割合に近時人々が取材できるようになった部分のことを割合し、私が3年間に亘って居住し、時間をかけて学んだシルクロードに大きな役割をもつ喇嘛医学を、中心に記憶が散失しないうちに記述したいと思う。幸い1977年8月21日のNHKテレビジョンは内蒙古の取材を伝えてくれ、これが第2次世界大戦後の部分的な改革を多少見せてはいるものの、略々私の取材当時と、生活や風俗に於て変化していないことを知り得て勇気づけられたわけである。

シルクロードのうち、オアシス・ルートやステップ・ルートの東方の起点を出た部分には、千古秘密のヴェールに包まれた、無限と悠久を思わず茫漠たる砂漠と草原の地帯が続き、蒙古民族が家畜と共に水草を追って、昔も今も変わらない放浪の遊牧生活を営んでいる。

嘗ては有史以来比類を見ない強大な帝国を建設した民族も、其後清朝の懐柔と疑満の政策により衰乏への一途を辿りつつあった。

大自然の中に時間的にも地理的にも忘れ去られた蒙古人は、自然の力の前に乏しい人間の知恵や詐術の無力さを知らされ、理解し難いほどの迷信的な宗教的慣習の虜となっているのも無理からぬことである。私はたまたま戦時中に第1線の隊付軍医としてホロンバイルに3年間生活し、蒙古人たちと仲好しになり、その珍奇な日常生活や、伝統的な文化に接する機会があった。たまたま彼等の間にラマ医学という独特な医術があり、その喇嘛医学研究所があることを知った。

シルクロードの医学

その所長ソトノム氏は 喇嘛医学のマーランバという 最高学位をもっていることを知った。会話に必要なロシア語を勉強しながら、ソトノム・マーランバから喇嘛医学のアウトラインを聞くことができ、同様の医学が少くとも蒙古やチベットなどシルクロードの東の部分で行われている医療の基礎であることを知った。

私の最初の好奇心はたちまちその荒唐無稽に対する失望に変わったが、再転してその内に含蓄される幾多の暗示と、治療よりも先ず予防に重点をおく東洋医学の良い面をもって、ともすれば人間関係を逸脱し対症療法に走り易い傾向のある現代医学に鋭い批判を投げるような自然療法重視に学ぶべき点があることに気づいた。

もとより非科学的な伝典を基とした喇嘛医学に理論的根拠を期待するのは無理である。しかし彼等は治病に関して何か直感のようなものを持っていて、時として治病の捷徑であることも屢々ある。自然生活中に習得した衣食住の慣習や治療法の中に、ともすれば文化の名の下に自然と背馳しがちな生活を送る現代人に警鐘を鳴らす多くのものが存在する。

医学ももともと先祖からの経験や、偶然の発見が集積したものの上に築かれ、それが科学づけられ、理論、系統化されたものに、創意が加わったものである。

喇嘛医学は学問的説明はなく、表現も原始的であるが、個々の誘因、症候や、内的素因と自然治癒力に重点をおいていることは、ややもすれば病名、病原体の究明を過大視し、時には病原体がそのまま疾病の本態であるかのように見做す行き方に反省を促すことを見逃してはならない。

一般的衛生状態

シルクロードの全般、とくにその東方地域は漂渺とした蒼海にまごうばかりの草地と、砂漠の連続で、緩やかな丘陵が波のように起伏する一望肅条の曠野である。

その気象は海洋から遠く隔っているのと、風雪を妨げる高い山脈が圍繞するため、定型的大陸的気象である。寒暑ともに酷烈をきわめ、また乾燥しているのを特徴とする。

1年の大部分（9月—4月）はバイカル湖を中心とする高気圧の影響ではげしい烈風が白皚々の荒野を吹き渡り、生気も動きもない万物冷凍の長い冬である。

4月末になって迎春花が冬の去った事をつげると春は急テンポでやって来る。萌え出した牧草を百花燎乱と彩り、生物は生気を甦らせ、鳥獣は咽喉もさげんばかりの狂想曲を奏でる。

しかし5月の末頃からは全大陸を覆う低気圧の勢力圏に入り東南の季節風が、地表から砂塵を捲き上げ黄塵万丈の嵐の季節となる。

6月頃からは季節風のもたらす湿気は凝って奔流のような豪雨となり、低地は沼に変わり、湖沼や河川は氾濫する。

雨期が去ると次は連日日も眩い烈日が輝き、地平線から出た太陽は大空を大きく孤状に迂回し、長い、熱砂の、焦熱地獄の季節である。

しかし8月の末にははや肌寒い秋風落莫の季節で、9月には初雪が烈風に乗って、冷酷無惨な長い冬の到来をつげる。

厳寒期になると零下40~50度にも気温は下降する。（世界の寒極シベリアのベルホヤンスク、オイミコヤンでは零下70度になることもあり、私達の実施したソ蒙国境の三河、トレホレチエ、での寒地実験で、零下53度までの想像以上の寒さを体験した。）

しかしこの期は却って風が止み、積雪も少くなり、厳寒の日を除いては、獣類が角や蹄で雪を掘り、立ち枯れの草を食んで生命を継ぎ得る。

蒙古人の生活や慣習

一部の地域では近代化されたとはいっても、一般の蒙古人は遊牧生活を営み、水草を追って転々流浪の生涯を送る。彼等にとって家畜は人間のためのものというより、家畜のための自分たちと思われるほど家畜優先の生活である。家畜は家族、財産であり、日常の最も多い話題の中心でもある。

「今日は、に代る挨拶が「犬はどうですか、というくらい徹底したもので、20以上の数字の計算もニガ手の彼等が、数千頭の羊を飼い、数はわからなくても、個々の羊を覚えていたため1頭でもいなくなれば気がつき探し求める。

羊を飼うために牧草は大切に、良い牧草の土地を古来争奪してきたため、領域の決め方も山系や河川というより、強力なほうが牧草の良いところまで領有してきたのである。

私達が生死の極地にまで立たされたノモンハン事件の原因もこうした領域の解釈のちがいがもとになっていたのである。

牧畜一辺倒に彼等を追いやった根拠の1つも、喇嘛教のタブー、即ち耕作によって土中のミミズを斬り殺してはならないと信じ農業を営まず、放牧生活に徹している。

家屋

家屋は移動に便利な包（^{パオ}グル、ロシア語ではユルタ）である。分解、組立ても簡単で約30分でできる。移動には彼等のトラック、牛車に積む。夏は涼しい丘陵の東北側、冬は東南向きの日射のよく、朔風を避けた峪地の斜面に居住する。包とは円い白いお碗をふせたような（まんじゅう＝^{パオツ}包子は形が包ににているから、そう名づけられた）直径3—5メートル、高さ3メートルぐらい、壁は楊枝を矢来に組んでつくり、天井は楊枝を傘の骨のように組み合せ、すっぽり羊毛製のフェルトで包み、馬の尾毛を編んだ綱でしばってある。戸口から中央は土間で、中央には爐があり、万能炊事用の大鍋がかかっている。周囲は10cmぐらいの床板があり、その上には毛皮や絨氈が敷かれ、家具が置かれている。出入口は狭く、正面には祭壇が設けられ、ここには心の糧であり、全生活でもある喇嘛と、心の太陽、希望の源泉ギンギス・ハンの像（今では勿論毛前首席）が祭られている。天窓があって採光、排煙の用をする。夏は涼しく、冬は暖かく、まったく気候に合ったものである。極寒期には更にその上にフェルトを重ねる。

燃料

蒙古、チベットに限らず、シルク・ロードの大部分は燃料として、樹木に乏しいため、主としてアルガル（獣糞）を用いる。包の周囲には乾燥した牛糞の山で奇異な光景である。この山で貧富の程度がわかる。アルガルは羊糞が最も上等で火力が強く、火持ちもよく、無臭でアセチレンのような光芒でよく燃え、次は牛糞が最も多く用いられ、ラクダ糞が最下等、ともに刺激性の臭気と煙がでる。

被服

被服は中国一般のに比しややゆるやかで、右前である。ズボン（ウムド）をはき、その上に上衣を着け、鮮黄色の帯を房々と結んでいる。女性、子供の服も同じような型である。獣皮でつくった靴をはき、寒い季節には更にその外に羊毛で足を巻いている。夏は裸足の者も少ない。衣服の材料は主に羊皮で、その外に商人から購入した布を用いる。

いったん身に着けたが最後、破れるまで、洗濯は勿論、更衣もせず、垢と脂で黒光りになっている。しかも衣服の一部がタオルから食器拭き、雑巾の役までする。

誕生時に塩をとかした温湯で産湯を使ったあとは、身体を清拭したり、入浴することも

殆どない。こうした人達がせまい包内で家畜なども入れて密集生活をしているので不潔さは感嘆のほかない。これは水を神聖視する宗教的な信条、つまり水を濫費すると死後は魚に生れ変るといふ迷信のためである。

食 物

主食は羊であって、牛馬豚鳥が稀に用いられる。牛馬は飼育の目的が、牛は運搬用、馬は乗用（靴がわり）で、肉を用いるためではないが、乳汁は盛んに利用する。豚は仏典には食べてもいいとなっているそうであるが、あまりいなかったのと嗜好に適しないので、一般的には用いられない。

要するに正式の食事とは羊を食べることで、客を遇する時などは必ずこれを供する。

尾の脂肪分の多いところが上等で、頭から尾まで完全にそろった、なるべく大きいのを提供するほど相手に対する尊敬を表わす。これを軽く水煮にして、各自が腰に吊っている蒙古刀で削って、岩塩をつけて食べる。貯えるにはまず塩漬けにし、日光に当てて乾燥する。冬なら数分で完全な冷凍肉になる。

蒙古人は肉食の時に必らず臓器も血液も摂取し、栄養素の偏りを防いでいる。

鳥や卵も食べるが、卵は一部の人には仏典によってタブーである。魚類はブリヤート族の一部は食べるが、一般には食べられない。その理由は、彼等が神聖視する水を護る仏（ボルハン）の使者が蛇であり、その化身が魚であるとの迷信に基く。

飲料には牛乳や山羊乳が盛んに用いられる。また牛乳は酸仍子（アイラク）といって酸乳、つまり乳酸醗酵した軽いアルコール飲料として用い。黄油（シヤラ・タラソ）というバターやウルムというチーズにしたり、ホロートというヨーグルトなどをつくる。またこれらのものは物々交換や貨幣のように用いられる。

牛乳や羊乳などを醗酵させて乳酒を醸造する。馬乳からのものが有名な馬仍酒（クミス）で、古来結核の予防、治療の特効薬と考えられ、ロシア人はそのまま、または近時は民間薬再発見の見地からストレプトミチンやチボン（チビオン）と併用している。

穀物も小麦がアフガニスタン付近が原産地でもあり、インドなどから製粉したいわゆるチャパテイ（お好み焼風、未醗酵パン）などの形式で、広くシルクロードで食べられているが、蒙古ではふつうは茶の中に入れて嗜好品として用いる程度で、高粱、大豆、粟、小麦等を炒米（ホールサン・ポダー）という。一部の蒙古人はチャパテイ風のメリケン粉パンを食べる。コーカサス人の食べるママリーガは小麦やトウモロコシ（コーン・スターチ風にしたのもある）などの雑穀をチーズとともにチャパテイ風にしたものである。

野菜は殆ど食べない。`自分たちは家畜じゃなくて人間だ。草なんか食べるものか、`というプライドがそうさせる。しかし葱などを稀に生食の形で薬味に使っている。調味料には塩を用いる。これは古くから重要視され、各旗（旗とは政治的な1区画）にある塩湖から岩塩を採取して用いている。ダブスノールやホインゴール（ノールは湖沼、ゴールは河川）北岸のものは有名である。

こうした以上の食物を日に数回分散型に摂るが、羊を食べる時（1日に1～2回）だけを食事という。

茶

茶（チャイ）は古来非常に重要視されている。

明の嘉靖の年代に韃靼の大王アルタン・ハンが西海から山西にかけて猛威を振り、明が滅亡に類した時、明から茶を絶たれたため忽ち戦力を失い、磚茶を供給してもらうのを条

件に帰順したくらいである。茶を供給しなければ獲得しようと中国内地に侵攻するし、一種族にだけ供給すると、忽ちその種族が強力になり、全種族を支配し、やはり中国内地に侵攻してくる。故に漢人の蒙古人政策は、彼等を分割して互に牽制させるため、茶を公平に、必要最少限度に与えることが秘策であった。

彼等の用いる茶は磚茶で、主として南支から輸入される。磚茶とは茶の葉や茎をレンガ状に圧搾したもので、これを臼で挽いたり、小刀で削って、牛乳や羊乳と少量の塩を加えて煮る、いわばミルクティの型で飲用する。

肉食を主とする彼等がこれによってしらずしらずの間に、生体内ミネラルの恒常性を保ち、同時にビタミンCを補給しているわけで、磚茶を用いることは彼等には最高の乾燥野菜を用いていることになる。1日数回も4～5碗ずつ喫茶する風習をもっている。

煙 草

煙草（タムヒ）は愛好され、子供も公然とくゆらせたり、嗅煙草入れを腰にさげたりしている。葉煙草よりむしろ嗅煙草（ハムリン・タムヒ）が常用される。葉煙草はきざみにしキセルで喫煙する。煙草入れに容れ、腰に下げる風習は日本の時代物映画のようである。嗅煙草は小さな扁平な瓶様の容器に入れ、栓につけられた小匙ですくって嗅ぐ。その容器は高価を競ったもので、挨拶の時などには相手に嗅煙草を提供し合う風習がある。

水

水は乏しく、貴重なものである。湖沼はあっても半数以上はアルカリ性が強く、藻類も生えず、魚も住まないし、付近に草木も生長しない。勿論飲むこともできない。日本で想像する清水とはほど遠いもので、私は現地の子供が湖や川の絵を描く時に水を褐色に彩色するのに驚いた。飲水は主として井に依存している。水質は悪く、量も少く、多くは黄白色に濁り、浮遊物も多く、石灰塩類、クロール塩類、硝酸、亜硝酸、鉄分などが例外なく検出せられる。井は水深が僅か1m内外で、多くは入口部が地平面より低位にあり、家畜の飲みこぼし水、糞尿、不潔物、腐敗物等が流れこむ。稀にやや清澄な湧水がみつかれば神聖視して礼拝する。彼等は決して生水を飲まず、茶にしたり、沸かしたものを飲むため有害なものや、病原体も除毒、消毒され、健康を保って行けるのである。

喇 嘛 教

発源地はチベットであるが、蒙古では深く人心の奥深く食い入り、生活基準のすべてが喇嘛教である。それは清朝が勇猛、殺伐な蒙古族を精神的に去勢して無気力にさせる目的に利用したこともあるらしい。

喇嘛教とは無上、すなわち優者の意である。要するに仏教ではあるが、偶像崇拜の怪奇な宗教である。家族の1人が出家する事により九族が救われるとのことで、来世の幸を祈るため、長子以外の男子は悉く出家させる（これがいっぽうで人口増加を抑制するのに役立っている）また莫大な資材を喜捨して豪華な寺院を建てる。荒漠、単調な大平原の中に龍宮のような喇嘛廟を忽然と見出す時は、お伽話の絵本をみる感がある。

この中に人口の半数に近い僧が居住している。大多数は（現在はちがうそうであるが）無智文盲で、聞き覚えの教文を唱えたり、鐘、太鼓、笛を意味もなく鳴らすのが仕事、あとは徒食、無為の生活を営む。彼等が葬祭、訴訟、教育の役をつとめ、疾病を治療する医師でもあるため崇敬されている。生産活動はせず、原則として妻帯も禁じられている。閑居して不善を為す連中も多いため何回か反宗教運動、時としては力を以ってこのそれすらも狂信に近い強い宗教心をゆるがせなかったのである。

大海のような砂漠に生れ育ち、原始のままの生活を送っていると、自然の猛威の前での人智のはかなさ、人間の無力さを知り過ぎているため、必然的に宗教に慰安と希望を求め、狂信の殻の中に閉じこもり、自然に反抗して生活を開拓して行く煩わしさを避け、黙々と自然の節理に従う安易さを撰択するのは当然の帰結である。

これに乗じて伝統的な威力と魅力をもって望むのが喇嘛教である。

喇嘛医学

喇嘛医

総ての喇嘛僧が医術を行うのではなく、喇嘛医（エムシ・ラマ、エム＝薬、医学）が行う。エムシ・ラマはチベット語のマンブダサンという医学校が大喇嘛廟に付属しており、ここで23年間も修学し、はじめて正式のエムシ・ラマの資格が与えられる。

喇嘛の医典はチベット語で書かれているので、チベット語の研究からはじまり、初等科（トドジンダ）、中等科（ドムダジンダ）、高等科（ガールンジンダ）と次第に修業を積む間に診断学、治療学等を研鑽し、厳重な終末試験に合格した者がマーランバという最高学位が与えられる。しかしこうした正式のはごく稀で、普通の喇嘛廟に数人いるエムシ・ラマは勿論無資格で、先輩のあやしげな魔法医学（マジック・メディシン）を見習って行うのはまだましな部類である。

私の滞在当時のホロンバイルに曲りなりにも医育機関のあった廟（スム）は7に過ぎなかった。アラシャン、ウプトク、アッサリ、シラノジュインヂェン、ナマゴリイン、ホーチンバランガ、ウーリットの各スムである。

喇嘛医学の経典

原始時代にはすべての民族を通じて、疾病を神罰や悪鬼のしわざ、或は妖術や呪祖のためと迷信する。そして医神なるものが存在する。これが魔法医学、宗教医学の特徴である。詳述を避けて先きに進もう。

喇嘛医学は喇嘛教とともにその源泉をチベットに発し、オトチという仏（ボルハン）の著した医学に関する仏教教典がすべての基本になっている。オトチ・ボルバン教典はチベット語で書かれていて、ドルベン・テスン・スドル（4つの根本経）という。

その4つとは、病理学、衛生学、治療学、薬物学であって、教義の根本は、疾病に罹るのは精神が完全でないため、すなわち人間は天性愚昧であって、迷いや欲望、煩惱、怨怒などの悪い精神のためで、これを治療するにはまず祈祷が大切、他のすべての療法はこれを補足するために併用するのだという。

人体の構造

オトチ・ボルバンに依ると人間の身体は5つの物質から成りたっているという。すなわち——土（ショロイ）、水（オス）、火（ガル）、風（ヒイ）、空（オグトロゴイ）で、これらが互に相生、相剋して平衡調和を保っているものであるがが何れかが増加、減少、消失したため相互間の平衡調和に破綻をきたした時に疾病に罹るという。

この考えは古代インドのバラモン（BC 1500年頃）に天地をつくる4要素として地、水、火、風を考え、仏教でも地水火風を4大と呼んでいる。中国の漢民族の文化（BC 2000年頃）で医神といわれる神農と黄帝が医方をつくった背景の陰陽五行の思想の五行は木火土金水をいう。ギリシヤのエンベドクレスの宇宙構成4元説（火、水、空気、土）を考え、心臓左心室には精気（ pneuma ）があって動脈を通じて体に送られると考えた。その精気が風（ヒイ）に相当するかもしれない。シルクロードを通じて東西南北の文化の交

流がこうした思想を生んだものと考えられる。

解剖学的、生理的知識、殊に臓器の位置、機能に関するものは、貧弱で、曖昧、不正確をきわめ、黄河文化の影響で5臓6腑説が行われ、それはだいたい漢方医学の流を掬むもので、たとえば心臓は風の臓器という。精神の存在する場所は心臓であるという。その理由は悲哀や恐怖によって心臓が痛み、喜悅によって心臓が躍るではないか、と考えている。

イギリスの天才ウィリアム・ハーヴェーによって血液循環の理が発見せられるまで、動脈には精気（プネウマ）が含まれていると、ギリシャ医学やローマのガレノスの説が信奉されていたわけであるが、蒙古、チベット医学では動脈には元気のいい血液が充満し、血液の循環することもわかっていたのだとソトノム氏は力説していた。

人体には4種類の脈（脈管の意味）がある。——赤い脈、黒い脈、青い脈、白い脈で、赤は動脈、黒は静脈、青はリンパ管、白は神経のことを指すらしい。

病気の種類

病原論から病気をシャラ、バドガン、ヒイの3がすべての病気の基本になっている。

種々な原因によって前記の5行の間の平衡調和に破綻がきて、体内に熱が多く蓄積するとシャラになり、反対に冷が身体を支配するとバドガンになる。ヒイはシャラ、バドガンとは趣を異にし、ある時は熱、他の時は冷と変遷する、交流電気のような病気である。

この3種の基本的なものほかに

ハロン。

ハロンとは熱という意味（有名な温泉のハロン・アルシャンは熱い聖水という意味である）で、ヒイとシャラが合併した時に成立する非常に熱のある病気を指す。

クイトウン。

クイトウンとは冷の意味で、ヒイとバドガンが合しておこる。全然熱のなくなる恐ろしい冷病である。

ボル。

ヒイ、シャラ、バドガンの3が全部合併するときになる重篤な難病で、衰弱して食物も摂れず、死んでしまうという。

以上のような種々の病気が基となり、それがさらに数多くの分派病に分れ、さらに分派を繰返して、病気の総数は1,616もあるというから404病の4倍もある。

診断の方法

主な診断法は3である。

問診。

問診が診断法の大部分を占める。すなわち——年齢、住居、飲食の状態や味、湿気の有無、旅行の方角、尿尿の状態など誘因と思われるいっさいの事を徹に入り細を穿って問診する。誘因というものも、普通の常識では全然誘因と考えられないような家畜の挙動や、自然現象まであり、それを十分に問いただすのである。

視診。

体格、顔貌、顔色、肥瘦、皮膚粘膜の色、乾湿、発疹、眼、舌、尿尿等排泄物など。

触診。

体に手を触れて体温や浮腫を察知、脈搏を触れ、異常のある局所を触って検査する。

以上の3方法によって身体を構成する5行のうち何が多くなっているか、少くなっているか、またそれがどんな状態にあるかを判断して病気を診断し、治療にかかる。

治療の方法

喇嘛医学では、前述のように、病気になるのは、その精神が完全でないためと考えており、この邪悪な心を医するには何よりも祈禱を重要視するが、そのほか2つの方法の医療を併用する。

食餌療法。

まず生活規準を規正し、病気が軽微なときは食餌療法だけで治病する。重症のときはさらに厳格な食餌療法を行う。それは絶食させたり、食品の種類を制限する。常食の羊肉をやめ、穀類の粥や、小麦粉を摂取させたり、喫茶だけを許す。とくに熱のある病気には肉類、牛乳などを厳禁する。

薬物療法

食餌療法だけで治癒の困難な重症には薬物を併用する。薬品は漢方薬とよく似ていて、鉱物質や動植物の諸材料を用い、なかでも草根木皮はもっとも広汎に利用される。

薬草は各廟の喇嘛僧や、これに準ずる者が主として6, 7, 8月頃に山野を抜渉して採取し、これを乾燥し、粉末として貯蔵する。

蒙古産でない薬物は中国の商人から購入する。薬品のなかには食餌と区別できないものもあり、かなりあやしげな、たとえば水の中に喇嘛僧が読経後に強く息を吹き込んだものをアルシャン（聖水）とよび、有難がって灌頭したり、洗眼したり、内服したり、あるいは得体の知れないようなもの、フェッチズムの産物のような薬品も数多い。

薬の調合方法はすべて経典により、銀匙をもって内服させる。

外科的療法

薬剤によって治らない疾病には外科的療法を行う。これには切開や接骨などがある。そのほか薄刃の小刀をもって皮膚に浅小創をつける誘導療法、絡刺法、瀉血法、鍼灸療法、簡単な按摩術なども行われている。

薬物の種類

薬物の種類薬物（エム）の種類を簡述する。

タン

煎薬に用いる薬草を総称してタンという。病気になった時主薬を与えるに先立って、その主薬の最上の効果をあげるように身体の状態を調整する目的に吞ませる。

タルハ

もっとも普遍的に用いられる薬物であって、種々の薬品を粉末にし、症状に応じて処方した粉薬である。

普通の病気はまずタンを与え、次にタルハで治療する。

イレルボ

粉末の薬を蜂蜜や砂糖を用いて固形にしたもの。製法がむずかしいため普通は用いず、薬品を永く貯蔵する場合や旅行にもって行くなどの時に用いる。

トスンエム

はじめ水や油を煮沸しておき、適当の頃に種々の薬品をその中に入れ、更に長時間煮つめてつくる薬。主として夏期に製造する。

この薬は体が年齢や病気のため衰弱し、やせている者に与える特殊薬で、普通は50歳以上の老人にのみ用いる。

ウニスンエム

毒草や劇薬を配合調剤し、焼いて粉末にした、最も強烈な薬品で、性病治療に用いる。
アルヒエム

薬品を酒と共に煮沸してつくる。現在はあまり用いられていない。主としてハロンという病気の治療に用いる。

エルテニインエム

宝の薬という意味で、高価な貴重薬、不老長寿、無病延命とかいう虫の良い目的で高貴の人が用いる仙薬。漢方の人参、トラの性器、ジャコウ、鹿茸などは外来品で、喇嘛医の独自なものとして、水銀、金、銀、宝石等の製剤がある。高価すなわち貴薬という思想。

エルテニインエムの最たるものは水銀（ムング・オス）で、喇嘛医の治病の最後の手段である。おそらく水銀の美しい色、金属であるのに液状であること、容易にアマルガムをつくって固形になり、色彩を変えずなどの神変摩呵不思議なことが気に入ったのだろう。まさか水俣病の原因として騒がれるとは思ってもいなかったらしい。

ハンダ

薬草の葉や花を水で長時間煮つめ濃縮した薬品。切り創など一般外傷に用いる。

以上のほかにも種々の薬品があり、大部分は荒唐無稽、時には却って有害と思われるものもある。しかし時には合理的なものもあり、現代医学に用いられているものもある。

たとえば麻黄や甘草で、麻黄は砂地に産し、その根は6 mに達するものもあるという。その茎が発汗、鎮咳剤として用いられている。甘草は宿根植物の根で、甘味があり、粉末として種々の薬物と混じり、丸薬などの賦形薬に用いられている。このほか杏仁もとれる。シルクロードのうち崑崙山中のフンザ王国の有名な長寿薬クパーニも杏の種子からとった油である。

以上のような薬物が精神的影響によるプラセボ作用も加わって実際以上の効果を発揮するが、自然治癒力（フィジス）によって治ったものも薬物の効果と盲信するのは先進国と同じである。とにかく喇嘛医学では疾病の治療よりも予防に重点をおいている点は認めていいたいだろう。

主要な疾病

非衛生的な生活と、非科学的な考えをもっている彼等では些細な病気も、いつとはなしに宿痾となり、致命的なものになることも少くない。またいったん伝染病が蔓延した時は、燎原の火のような猛威を逞しくする。このような自然淘汰によって虚弱なものは夭折し、頑丈なものが残る。先天性梅毒が多いとのことであったが、実際はあまり見かけない。

蒙古、チベットの病気も、何等本質的には異ったものではないが、殆ど処置をせず放置してあるため、一見珍奇な疾病のように見えることがある。平素薬など縁遠い彼等には、日常薬でも驚くべき効果を示す。

喇嘛医学では病気というより、症状、すなわち漢方の「証」によって治療するので、いろんな病気が1つの証に包含され、同じ病気が証によって種々に分類されている。

主要な病気は次のとおりである。

ヒジク

伝染病の総称で、1人がこれに罹ると、次から次へと周囲の者が罹る。彼等は同じような病気が他の民族ではそう蔓延しないのは、自分たちにこうした病気を防ぐ能力が足りないのだろうと解釈している。

ヒジクの治療には粉薬を与える。ヒジクにも種類が多くあり、高热が持続してうわごと

シルクロードの医学

を言ったり、意識が濁るもの（チフス等）、痙攣したり、昏睡状になるもの（脳炎や髄膜炎等）、呼吸困難や咳嗽、喀痰の頻発するもの（肺結核、肺炎、気管枝炎等）、下痢が続き、血便がでるもの（赤痢、アメーバ赤痢）、悪寒とともに高熱が週期的に上下するもの（マラリア、カラ・アザール等）がある。マラリアらしい病気はセシリンクと呼び、蛙を生そのまま食べさせると、急に下痢をおこして治るのだという。

もっとも恐ろしい病気はタルバガナ・メレナと呼ばれるペストである。この地特産のタルバガン（モルモットやウサギに似た嚙歯類）によって媒介せられるので、この名前がついている。（メレナは病気の意味）。一度この病気が発生すると止るところを知らず、彼等の為し得る対策の総ては交通遮断によって、病気が消滅するか、地域の住民が全滅するかを待つばかりで、地域の住居、家財もいっさい焼き払われる。タルバガンそのものがこの病気をおこすと考えられているため治療は少々風変わりである。タルバガンは水をのまない動物だから、タルバガンの敵である水の精、すなわち魚を食べるのがいちばんよい、とされている。

サンコ

食物から来る恐るべき急性病、冷いものや煮沸しないものを摂ったり、食餌の不摂生により起る。腹痛、悪心、嘔吐、下痢、人事不省、痙攣等の症状が激しく、その日のうちに死亡することもある。

懼病と同時に或種の粉薬を与えると死をまぬがれる。薬物の外に瀉血も試みられる。

ハニャーラック

咳嗽、喀痰、時には咯血し、顔色蒼白となって衰弱死する、漢方の癆咳に相当する、おそらく大部分は肺結核である。

治療には症状によってちがうが、粉薬を与えたり、動物の臓器を摂らせたり、馬仍酒（クミス）は古来ハニャーラックの特効薬である。

ホルキロ

咽頭痛を起したり、咳嗽を発する、風塵期に多発する病気、扁頭炎、咽喉等炎を指すらしい。乾燥と塵埃が原因らしいが、彼等は気候に馴化しているのと、1日に何回となく温かい茶をのむことが習慣づけられているので、案外多くない。

バム

チベット語からきた病名で、浮腫を起す病気、すなわち心臓、腎臓、内分泌、代謝病を包含する。療法としては薬を食べさせたり、羊乳をのませたり、浮腫の部分に馬の胎盤をまきつけたりする。

食物の種類が少く、偏食に傾きやすい状況にありながら、放牧地帯に代謝病、内分泌病が少いのは確かに注目すべきことで、彼等が動物を食べる時に必ず内臓や血液も摂取することにもよる。ただ熱河地方や崑崙の臭地には風土病的にクレチン病がある。

寄生虫病は広く蔓延している。歯の病気は手入れをしないのに極めて稀で、街に定住している者に限られている。砂糖を用いないことも原因と思われる。

ニヤル

細いという意味で食物が通る道に狭窄がおこる病気で、衰弱して死ぬ。バドガンの1種である。喇嘛医学にガンという概念があるのは誠に興味が深い。ニヤルの時には腹部に骨のように硬い腫瘍ができるのと、軟かいのができる場合とがあるという。硬い場合は雁の生血をのむと治ることもあると信じられ、狭窄を開通させる目的で水銀（ムング・オス）

に或種の処置をして、の毒性を除去してのませた機械的に道を拓く方法をとる。しかし水銀の毒性が完全に除去されていない時は死ぬ、とうまく説明する。

ジャク

クイトゥンの1種で、最も多い病気の1つである。湿気、寒冷期に幾日も馬で旅行する時に罹る淋病、軟性下疳などの性病で、根治は困難。横疳には酒で燻法する。

トンブー

喇嘛教とともにこの地域の2大害毒といわれる梅毒で、広く蔓延している。人から人へと伝染し、不潔からや性交によって伝染し、親から子にうつることもある（先天性梅毒）という。タルハとハンダを用いて治療するが、難治で、1度消失したとみえてもまた再現するやっかいなもので、彼等の病気の多くが、その基にトンブーがあることに気付いている。

ゴプトルゴー

赤い発疹のでる病気を全部これに含める。麻疹、発疹チフス、猩紅熱、風疹などのほかに急に発熱し、赤い発疹を発して2～3日で解熱する風土病もこれに入れられる。

痘瘡はボルハン・ボーガ（仏が来た）と呼ばれ、非常に恐れられている。痘瘡の予防法として、特筆に値するのは喇嘛医が古くから人痘の種痘法をしていたことである。（ジェンナーが種痘法を試みたのは1796年）。

なるべく軽い痘瘡患者があったとき、その発疹の痂皮をとって乾燥、粉末にして銀の管を用い、鼻腔に吹き入れる。そのほか手痘を用いての種痘法もある。手痘の痘泡の膿汁を採取し、これに何かわからない薬を混ぜ貯蔵しておき、布につけて鼻腔に入れたり、鼻腔に傷をつけて植えつける。

ホイン

寒冷期に多発する病気で、関節が発赤、腫張、発熱、疼痛をおこして運動不能になる。関節炎や筋肉痛をおこす、リウマチ、変形性関節炎、痛風もあるかも知れない。

彼等は寒冷のため、運動過多や不足による筋肉のこりが原因だろうと考えている。治療にはオルガへ（迎春花ソトノム氏はロシア語のポドシュネジュニク迎春花に似た花だと説明した）の花を煮沸し、牛乳に入れて燻法する。

ホルガン

リンパ腺腫で、原因については種々の憶測がある。頸部リンパ腺腫（るいれき）などは知らないうちにネズミが忍びこんだために起ると考えられ、おびき出すためにネズミの胎盤で湿布したり、瘻孔ができたときには麝香をぬる。

ハム

頑癬や湿疹などの皮膚病。水を神聖視して洗濯や入浴をしないためと包内での密集生活などのため罹ってないほうが珍しい。初期の3日間我慢して爪で搔かなければ治癒すると考えられている。療法は豚脂に漢人から買った硫黄を混ぜて塗る。

ニトニブシン

眼病である。中でもトラコーマが蔓延している。風塵、不潔、光線が強すぎるためと、包内でのアルガルを燃料にするので刺激性の煙が発生するためニトニブシンに罹っていないほうが例外である。風塵期に多発し、伝染しやすいニトニブシンをガムシホ（急性結膜炎？）という。雪盲が少ないのは、よく雪になれているのと、多くは色眼鏡を使用しているからである。また蒙古には眼の中にとびこんで眼病を起させ（産卵して？）る1種の

蠅があり、放置しておくとう失明してしまう。これの対策は直ちに砂糖を眼に入れるとよいのだそうである。

ガルズ

犬に咬まれておこる水の飲めなくなる病気、恐水病である。治療には毒のある、玉虫に似た昆虫を銀の針で刺し殺し、そのまま暗所で乾燥し、これを強烈な酒に混ぜて服用させる。

ホルガナネウブシン

ホルガナとはネズミのこと、ウブシンは病気、つまり鼠咬症である。いろいろの療法があるが、なかなか治らず。時には自然に癒えることもあるという。

ガルモゴイ

皮膚の小さい傷からおこる鮮紅色の境界明瞭な斑を現わし、悪寒、戦慄を伴って高熱を發する病気、すなわち丹毒を指す。治療には山羊の大網膜の脂肪で湿布する。

この動物の大網膜の脂肪での湿布は、材料の少い、この地では便利で、私も捻挫や炎症の患者にやって見たが、しばしば好結果を得た。

オールガル

何ものかに怯かされたり、恐怖を感じた後、精神の異常を来し、うわごとをいったり、幻覚をおこして怯えたり、動物のしぐさをまねたりする。動物馮依（つきもの）や分裂病のようなものをいう。治療はもちろん、馮き落しのための、祈祷が主になる。そのほかは安静に包内で休養させておく。

サリサウブシン

サリキとは風、ウブシンは病。こんかんの様なものや、半身麻痺や痙攣等の総称。発作性のとき急性に一度におこるのが多い。トンプーが原因になっている事が多い。

療法は加持祈祷が主であるが、変わった療法として、患者と山羊などを並立させておき、学徳高い喇嘛僧に祈祷してもらおうと病気が人間から動物に移行し、次第に患者と同じ動作をやるようになって、人間は治る。（迷惑なのは山羊である）。また人間や動物からメリケン粉製の偶像に移行させることもあるという。そのほか有名なハロン・アルジャン（熱い聖水という名の温泉）などの温泉療法もある。

以上のほか何しろ1616種も病気があるので、とうてい覚え切れない。なお極寒期には彼等にも凍傷がおこることがある。

結 語

以上がシルクロードに古くから関心をもった私が、喇嘛教支配下の地域での医学について、拙いロシア語で、喇嘛医のソトノム氏から伝えてもらった喇嘛医学を、わずかに残った備忘録から思い起した記録の一端である。

陳舜臣、そして藤堂明保、司馬遼太郎、団伊玖磨、井上靖、宮川寅雄、東山魁夷、中島健蔵氏などがウイグル(タクラマカン語の「入ったら帰ることのできぬ」)へ行き手記を發表したのを見た。私もまた何時の日にかシルクロード全般の医学探究の機会が訪れることを念願している。

なお喇嘛廟での医学資料は先方の好意で、写真に撮らせてもらったが、勃発した戦乱のためと、空襲によって自宅が焼失したため散逸したのは残念である。その殆どはカリフォルニア大学の Tibetan Medicine の挿絵と同じものである。